

---

# 短編集

片岡

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集

### 【Nコード】

N3303Z

### 【作者名】

片岡

### 【あらすじ】

ジャンルも方向性もバラバラなものを無造作に詰め込んでいく予定。モバゲーやってた頃に公開していた作品もあります。

馬鹿だったり病んだり意味わからなかったり。

たまに著作権放棄のお題をお借りして好き勝手やってるかもしれませんが。

いじめく(前書き)

阿呆です。

## つづめく

“それ”は闇の中で虚空を見つめていた。そうして時たま、通り過ぎる人々を恨みの籠もった瞳で睨みつけては暗闇で蠢うごめいていた。

父を、殺された。次に母を、そして妹。果てには手に手を取り合っ  
てようやつと共に逃げ延びてきた弟までもが、その凶刃にかかり、  
尊い命を奪われた。

おれたちがいったい、何をした！

……そう、叫び出したい気持ちだった。が、少しでも目立つよう  
な行動を取れば己も殺されてしまう。“それ”はぐっと堪えた。

だが、悔しい。

おれたちがいったい、何をした……？

其処に在るというだけで嫌われ、蔑まれ、命を奪われる。こんな  
にも不条理なことが、果たしてあって良いのだろうか。

復讐、してやる。

そう、そうだ。復讐、復讐だ。復讐してやるのだ。家族の、仇を  
取るのだ。

“それ”は駆けた。疾風の如く素早く駆けた。

「きゃああああ！」

絹を裂くような女の悲鳴。手には、禍々しい凶器。

またアレか！！

必死に逃れようとするも、時既に遅し。あの悪夢が、再び襲う。

徐々に動かなくなる手足。霞む視界。己の情けなさに、涙が出る。此処まで、か。

ああ、父上、母上、年端もいかぬ妹よ。最期まで己の身では無く、おれの身を案じた弟よ。仇はとれませんでした。もうすぐおれも、其方へ逝きます。

「もうやだあ！ どうしてこの家ってゴキブリがこんなに出るわけ！？」

かのじょ　たいよう

この夏が終われば、きっと私の命は枯れ果てるのだわ。  
張りのあるこの肌はしみだらけになってしわくちやの老婆のよう  
になるのだわ。

自慢の美しいこの黄金の髪は抜け落ちていくのだわ。

嫌。嫌よ、そんなの絶対に嫌だわ。

ああ、夏の太陽よ。燦々と私に降り注ぎなさい！

もっと！　もっとよ！

もっともっとと光をちょうだい！　もっと私を輝かせて！

そうよ。そうすれば、きっと私は一日でも長く彼の前で美しく咲  
き誇ることが出来るのだわ！

ああ、ねえ、愛しい貴方。もっと私を見てちょうだいよ。そうす  
れば、もっともっと、私、うんと美しく咲いてみせるわ。

この命を、咲かせてみせるわ。

ねえ、私を見て。

私は太陽の化身

（待つて、私から目を逸らしちゃ嫌！）

（ずっと私を見ていて？）

（そうすれば、太陽なんかよりも優しい光で貴方を包んであげるわ）

## 学校もの詰め合わせ（前書き）

学校っぽい単語で。



## 学校もの詰め合わせ

“ おはよう ”

「 おはよう愚民共！ 」

「 え……、なにお前。殺されてーの？ 」

「 お前、ちよつと金持ちだからって調子のんなよなー！！ くそつ、羨ましいー！！ 」

「 ふはははは！ 所詮庶民には到達することの出来ない場所にぼくはいるのだよ！ さあ、崇め、称え、いだあつ！？ 」

「 ふあああつ……。……あれー……。……おれ、なんか踏んだー……。……？ 」

「 「グッジョーブ！！」 」

殺意にみなぎってる奴  
村井 むらい

羨ましがってる奴  
赤城 あかぎ

金持ちな奴  
おくのみや  
奥乃宮

踏んだ奴  
さがさき  
嵯峨崎

“遅刻”

「せんせー、おはようございまーす」

「はいはい、おそようございます。市田、今は昼だ。確実に早い時間じゃない」

「あららー……。遅刻しました。ごめんなさーい」

「素直でよろしい。で？ 遅れた理由は？」

「川で溺れてるお婆さん眺めてたら遅刻しましたー」

「助けるよ。誤魔化すための嘘にしてもそれは酷いだろう。先生はお前をそんな子に育てた覚えはありません」

「いっちゃんもせんせーに育てられた覚えはありません」

遅れた奴  
いちだ  
市田

担任のせんせー  
たなか  
田中

“迷子”

「あいつ、おっせーなあ……」

「そろそろ行かなきゃいけない時間なんだけどね……」

「せつかくの修学旅行があいつのせいで台無しになるなんて、誠に遺憾である」

「ご立腹だねー……、椿さんは」

「すいませーん！ 道に迷いましたー！」

「遅いぞ、内山ー。お前のせいで椿がキレて先生はガクブルだった。罰として其処にある噴水の周りを五十周」

「ええ！？ なんなんだその体育会系のノリ！」

「お前が迷ったのは道ではない。人生である」

「相変わらず椿は俺に酷い！」

困<sup>ひだ</sup>つてた奴  
樋<sup>ひだ</sup>田

キ<sup>つばき</sup>レた奴  
椿

迷<sup>うちやま</sup>つてた奴  
内<sup>うちやま</sup>山

“居眠り”

「はい、じゃあ、この問題を嵯峨崎ー、解けー」

「せんせー、嵯峨崎は今ぐっすりおねんねタイムでーす」

「よーし、市田ー、叩き起こせー」

「いやでーす。いつちゃんの手が腫れちゃうでしょう」

「嵯峨崎ってそんな石頭だったっけか？」

「嵯峨崎、起きろ。先生はお前のせいで酷く困っておられる」

「ううーん……、おれ、なんだかとても眠いんだパトラッシュ」

「誰がパトラッシュか。殺されたいのか貴様」

「ぬあっ？」

「だいたい眠いとか嵯峨崎寝て……、うわぁ……、そこまでやるう？」

「椿ー、お前のその心遣い、先生はとっても嬉しい。でもな、先生、蹴り起こせとは言っていない。脳天に踵落としするなんて嵯峨崎を殺す気か。椿はもうちょっと皆に優しくしてやろうなー」

「酷く足が痛む。何故だ」

「嵯峨崎の頭は椿の踵落としに打ち勝ったのか」

「誰かおれに消しゴム投げただろう。おれの眠りを妨げる者は何人たりとも赦さない」

「嵯峨崎お前頭可笑いんじゃないのか」

嵯峨崎の頭は椿の踵落としの威力をものとしない。

人物紹介とか載せてたけど嵯峨崎と椿だけ覚えとけば問題ないと思う。

“授業妨害”

「えー、じゃあ、この式に当て嵌まる公式はなんでしょう。はい、嵯峨崎」

「先生、嵯峨崎また寝てるぜ」

「よし、村井、叩き起こせ」

「無理だつて。先生、こいつきつと何かの病気なんだ」

「仕方ない。じゃあ、秋澤、わかるか」

「先生！ 秋澤は手鏡に映る自分に夢中です！」

「よし、内山。その手鏡叩き割ってくれ」

「俺じゃ無理だ！ 嵯峨崎の頭に任せましょう！ えいつ」

「ほ、本当に割れた……。嵯峨崎くん、大丈夫かな……」

「微動だにしねーな」

「こいつ、実は寝てるんじゃないかって死んでるんじゃないのか」

「あああああ！！ なんてことすんだよ内山！！」

「だって先生が叩き割れつて」

「嵯峨崎もだが、秋澤、お前はいつたい何のために学校来てんだ？」

「勿論美しいオレを愛するために決まってんじゃないスカー。勉学に励むオレヤバくね？マジばねえ」

「……は、励んでないと思う……。っあ、ご、ごめんなさいっ……」

「秋澤、お前帰れ」

心配してた奴  
とりこえ  
鳥越

ナルシーな奴  
あきさわ  
秋澤

“ 抜き打ち ”

「この間やった抜き打ちテストのことだけどな、正直、ほんとと最悪だった」

「いきなり抜き打ちとかやるせんせーが最悪だと思ったー」

「市田、お前廊下に立つか？」

「冗談でーす」

「で、話を戻すが……、なんだ平均点30点って。舐めてんのか」

「先生ぺろぺろしたって不味いだけだろ？」



「内山、お前そろそろ本気でどつくぞ」

「私は先生ならぺろぺろできる」

「椿、正気に戻れ。それでまた話を戻すが、このクラスでまともな点を取れたのは鳥越と椿と真崎、この三人しかいない」

「へー、真崎もか。すげーな」

「えっ？ 滅茶苦茶簡単だったよ。ねえ、鳥越さん」

「えっ……、う、うん。簡単だった」

「あの程度で難問とは笑わせる」

「お前らちよつと殴らせて」

「といふかな、大体可笑しいだろ。なんでテストを開始した直後に過半数の奴が机に伏せるんだよ。少しは努力しろ。嵯峨崎に至っては名前すら書いていない。真っ白な回答用紙が手元に届いたときは先生、目が飛び出るかと思った」

「な、名前書いてないのに、わかったんですか……？」

「名前を書く欄に、“眠い”って書いてあった。記入してあったのはそこだけだった」

秀才まことそんな奴  
真崎

“居眠り 2”

「で、この公式を此処に当て嵌めて……、」

「 $x \parallel 2$ 、 $y \parallel 4$ 。これを代入すると……」

「ということだ。つまり……」

「であるからして、このように証明出来るわけだな。  
えー……、」

「……そろそろお前ら起きろ」

クラス全員でハイパーおねんねタイム

“ 授業妨害 2 ”

「少しよろしいですか、田中先生」

「鬼頭先生、よろしいですけどいったい何処から入ってきてんだア  
ンタ」

「え？ やだなあ、窓からに決まってるでしょう？ 見てたじゃないですか」

「そんな爽やかな笑顔で言われても。此処が何階だかご存知ですか？」

「四階ですよ？」

「ですよじゃねーよ」

「そんなことより前の時間でこの教室に教材を置き忘れてしまつて……、あ、あつたあつた。早く理科室に戻らなくっちゃ」

「どうして鬼頭せんせい二階にある理科室からわざわざ校舎の壁を伝つてこの教室に来たんだろうねー」

「ちょっとしたチャレンジです」

「今すぐ捨てる。その無駄なチャレンジ精神を」

チャレンジヤーなせんせい  
鬼頭きとう

“図書室”

「あ、あのつ……、赤城くん、図書室は飲食禁止で……」

「えー、別に良いじゃんか鳥越ー。腹減つたんだもん。仕方ないだろー」

「でも……、」

「あ、やべっ。コーラ溢した」

「        ツ！！    テメエえええええ！！    そこに直れええええええ  
！！」

「ええええええええ！？」

「図書室は飲食禁止だっつってんだろぅが！！    その汚れた本を修復するのにいたいどれくらいの時間がかかると思っでやがる！！  
一日だ……！！」

「た、たった一日じゃなか！」

「その一日でどれくらいの本が整理出来るんだろぅなあ！？」

「う……っ！」

「誠心誠意土下座しろ！！    三回まわってワンと言ええええええ！！  
！！！！」

「うううう……。    (ぐるぐるぐる)……わんっ」

「あれ、椿、鳥越に姉か妹なんていたっけか？」

「いや、あれは鳥越です」

「鳥越は二重人格なのか」

いつも内気な鳥越さんは本に命かけてる

“説教”

「いや、相変わらず田中先生の請け持つ椿と鳥越と真崎の三人はとても優秀な生徒ですなあ」

「はは、有難う御座います」

「これも偏<sup>ひとえ</sup>に田中先生の教育の賜物でしょうな！」

「いえいえ、そんなことは……、」

「ですが……、その他の生徒の成績が少し……」

「……………」

「三ヶ月待ちましょう。その間に彼らの成績を上げることができなければ、クビも覚悟して下さいね」

「マジでか……」

果たして校長に教員をクビに出来る権限があるのか。

信じる者は巢食われる

「ああ、可哀想に」

そう呟くと、声は届いてしまっていたらしい。彼女は恐る恐る俺を見上げた。

大きな大きな飴色の瞳。極上の蜂蜜みたいな、日本人にはあまり見ない綺麗な綺麗な髪。嗚咽を漏らす度に震える肩を慰めるように撫でるそれは美しい。

「だ、れ……」

「さあ、誰でしょう。誰であってほしい？」

「……………」

はくはくと何かを言いたげに口を動かし、そして閉ざしてしまっ  
た。とりあえず何も言わず、待つてみる。

こんな人気の無い冷たい廊下に一人座り込んでいるのは、桐山きりやま  
京みやこ。数ヶ月前までこの学園のアイドルだった女の子だ。

珍しい時期に転入してきた彼女は、学園の中でも人気のある男子生徒から溺愛されていた。しかし、それでも女子たちからの嫉妬を買ったことはなく、誰からも愛された女だった。

……………そう、数ヶ月前までは。



今はもう、誰にも見向きもされない可哀想な女の子だ。

桐山の人気が落ち始める数か月前、“彼女”はやってきた。望月<sup>もちつき</sup>

有沙<sup>ありさ</sup>。桐山に負けず劣らずのとびっきりの美人だ。

桐山のふわふわな髪とは違って、黒髪の真っ直ぐなロングストレート。目は赤。何処か冷たい印象を抱かせる、和風美女。

彼女の手によって、桐山は陥れられた。

俺はよく知らないが、桐山は裏では結構あくどいことをやっていたんだとか。

人気のある男子たちを身体で誘惑した。嫉妬で虐められないように男子たちの私物を女子たちに流していた。事実、男子たちの私物は度々無くなることがあったらしい。

あれよあれよという間に桐山の味方はいなくなり、今では皆が望月の配下にある。望月宗教でも作りそうな勢いだ。

と、まあ、話を戻して。

彼女　桐山がこんなところにいる理由は簡単だ。誰かに見つからない為。虐められない為。

が、その努力も空しく、結局見つかってしまったらしく、制服はぼろぼろになっている。

「誰で、あつてほしい？」

もう一度訊ねた。

すると、彼女は小さく、けれどはっきりとした声で言った。

「わたしの、敵じゃ、ない人」

「そう、じゃあ、味方になってやろうか」

「……ほんとう?」

期待の眼差しが突き刺さる。

さあ、俺は本当かどうか何も言わない。好きに思いなさい。さ

あ、俺はどっちだろうね。

敵と判断しても良いけれど、お前にそれほどの余裕は無いだろうよ。

甘く微笑んで抱き締めてやれば、すぐに背に細い手が回った。

## 信じる者は巢食われる（後書き）

逆ハーって御存知ですか？逆ハーレムの略称で、まあハーレムの逆ですよ。

逆ハー補正って御存知ですか？まあ、男共の好意を無理矢理その補正のかかっている女の子に向けるものですよ。

勿論、あんまり良いものじゃありません。大抵は途中で解けてその補正のかかっていた女の子は嫌われます。

傍観ものではもう王道ですね。傍観っていう非王道の中の王道。

で、逆ハー補正あるんなら、傍観補正があっただって良いんでね？って話。

もしかしたら続きを書くかもしれないけど、現時点ではそんな気力は全く起きないので一話完結に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3303z/>

---

短編集

2011年12月27日23時47分発行